

学部長 鎌田 首治朗

2018年度、プール学院大学を名称変更、設置者変更をして誕生した桃山学院教育大学は、1年目から志願者数が1600名を超え、一般入試志願者数では大阪府の私立教員養成系大学の2位になった。その後も前進は続き、2020年度は志願者数が1800名を越え、175名の定員に対して193名の1年生が入学してきた。そして、いよいよ2021年度は、175名から270名への大幅な定員増を文部科学省に認めていただき、大きな前進を果たすこととなった。

定員増自体が認められにくい現下の状況の中で、何故本学の定員増は認められたのかを考えると、そこにはすぐに思い浮かぶだけでもいくつも存在する、本学の問いがある。それは、自らが教員養成系大学であることへの深い自覚と責務から生まれた、自らのあり方を真摯に問うものである。例えばそれは、「小学校高学年での教科担任制に対応できる真摯な教員養成はどうあるべきなのか」であり、「チーム学校を真に実現することに役立つ真摯な教員養成はどうあるべきなのか」であり、「小学校、中学校における英語教育は、真にどうあるべきなのか。そして、それに対応できる真摯な教員養成はどうあるべきなのか」であり、「単にコミュニケーション能力だけにとどまらない、個人の『人格の完成』、『人間性の涵養』に大きく関わる言葉の力の教育は、どうあるべきなのか。そして、それに対応できる真摯な教員養成はどうあるべきなのか」という具合である。

この「桃山学院教育大学 教育実践研究」は、その本学が「教育実践」という言葉を織り込んだ研究紀要である。したがって、その質には、日本の教育実践、日本の教育現場が抱える課題に応えようとする自覚的な姿勢があるのか、そして、日々日本の教育のために奮闘する人々の力となり、その営みを支え、励ますものになろうとする自覚に満ちたものであるのかといったことが問われる。もちろん、その挑戦は一直線で表せるものではなく、時に大きな停滞や後退を伴うものであるかもしれない。しかし、停滞しても後退しても、決して前進することを諦めないものでなければならない。それが、「桃山学院教育大学 教育実践研究」という、「桃山学院教育大学」と「教育実践」の大事な二つの言葉が織り込まれた「研究紀要」の、自然であり当然のあり方である。そして、予想もできなかった苦しいコロナ禍の中で、日々人間としてのあり方、教員養成系大学としてのあり方が試され、

問われていることも、本「研究紀要」のあり方を一層問うものとなる。

この点では、梶田（2006）<sup>1</sup>が「方法論的反省のない著作物は教育分野に氾濫しているが（こうすればうまくいく）といったハウトゥもの、自分のやったことを単に綴っただけの実践記録、『この学校ではこうで、あの学校ではこう』といった観光ガイド的な教育活動のカタログ）、それらを集大成したとしても『教育実践学』を確立することは到底無理である」と述べたことの意味を深く受け止めたい。少なくとも「桃山学院教育大学 教育実践研究」は、この言葉をしっかりと受けとめ、具体的な授業をどうするのかという「やり方」だけではなく、「実践との関係」を意識の中にしっかりと置いた上で、それを支える学校と教師の哲学や本質的な問い（例えば、『人間性』とは何か』『人間性の涵養』とは何か）を自問自答する「あり方」を各執筆者が持ち、それぞれの「自分解」を積極的に展開する姿勢を忘れないようにしたい。

本誌が、学習者や学校の実態をまずは大切にし、教育の目的である「人格の完成」に日本の教育が迫っていく方向性を大切にしながら、教育と人間の本質的な問いに迫り、その問いに対する「自分解」の創造、生産に向け、果敢に挑戦するものとなることを願い、期待したい。この姿勢が明確に現れたときにこそ、本学が冒頭の「本学の問い」なるものに対して、かなりの成果を生み出す大学になっていると考えられるからである。

---

<sup>1</sup> 梶田叡一 2006 「教育実践学の未来のために」 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学の構築』東京書籍，pp.333-336.